

激動の 2021 年度入試 -共通テスト・新制度入試でどう変わったか？-

2021 年度入試は、文字通り激動の中、行われました。

2021 年度入試は、大学入試の新制度に基づいて行われる初めての入試でした。受験生や指導にあられる先生方も、今年の入試に向けて様々な準備を重ねて来られたと思います。しかし、大学入試センター試験に替わる大学入学共通テストには、実施の 1 年前になって大きな変更がありました。更に新型コロナウイルス感染拡大の影響で、総合型選抜の出願開始が 2 週間遅れる、共通テストの試験実施が 2 回設定になる、各大学の選抜方法も急遽変更されるなど、当初の予定に大きな狂いが生じました。このように目まぐるしく変化する複雑な状況の中で、今年の実験生は選択し、受験しなければなりません。受験生をご指導される先生方も、判断に迷われることも多かったのではないかと思います。

今年の実験はこのように様々な変動要因をはらんだ入試であり、その全体像を正確にとらえることは簡単ではありません。そこで、入試がひと段落したこの時点で、今年の実験を「共通テストに変わったことによる影響」「新制度入試に変わったことによる影響」「コロナ禍による影響」の 3 つの観点に分けて整理し、現時点で判明している影響を分析してみると、2022 年度入試に向けた指針や指導のポイントを検討してみたいと思います。

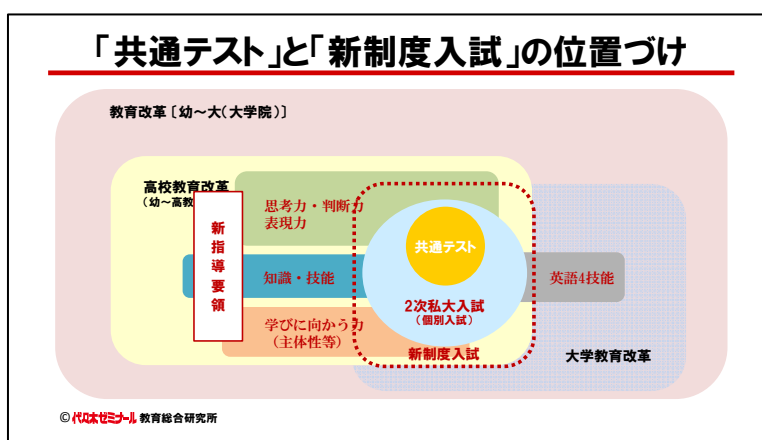
1. 新制度入試・共通テストの位置づけ ― 教育と入試の一体的改革

2013年5月に自民党「教育再生実行本部」から提言がなされ、高大接続改革の論議が始まりました。その後、首相直属の「教育再生実行会議」を経た後、2014年12月に中央教育審議会が新テストへの移行を含む大学入試全般の見直しを求める「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」という答申を行います。この答申を実現するための具体的プランが「高大接続システム改革会議」、「検討・準備グループ」で議論され、2017年6月末に「共通テスト実施方針」と「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」が発表されました。

このような経過を経て、大学入試センター試験（以下「センター試験」）に替わって大学入学共通テスト（以下「共通テスト」）が実施され、国語と数学で記述式問題を出題すること、英語については民間4技能試験も併用すること、そして、大学入試全体のルールも変更することなどが決定し、2021年度から新しい大学入試が始まる予定でした。

これらの変化の背景にあるのは、グローバル化の目覚ましい進展、それを支えるIT技術の進歩と普及、そして急速に進む日本の少子高齢化など、国内外を取り巻く環境の変化への対応力を育むことがこれからの日本の教育の課題であるという認識です。そのような能力を高校や大学でしっかりと身につけさせるための高校教育と大学教育の改革であり、その両者を円滑につなぐための大学入試改革が目指されたのです。

つまり、今回の入試改革は単に入試という一時点の改革ではなく、幼児教育から大学・大学院教育までを貫く日本の学校教育全体の改革の一環として位置づけられている点に大きな特徴があり、またこの大学入試のあり様が改革全体の実効性を左右するポイントと考えられている点が重要です。



このような考え方にもとづいて構想された新しい入試では、高校までの教育と大学での教育に共通する、「思考力・判断力・表現力」や「主体性」、「英語4技能」などが重視されることとなり、このような力を試す新しい性格の共通テストへの移行や、英語民間試験の活用、多面的で総合的な評価などが積極的に採り入れられることになっていました。

しかしご承知の通り、これらの新機軸は具体化の段階で実行上の課題の多くを解決することができず、当初の構想から大きく後退することになったわけです。

2. 新制度入試① —— 共通テストの開始

センター試験からの変化

2021年度入試を振り返る一つ目の観点は、「センター試験から共通テストに移行した影響」です。

新制度入試を特徴づけるはずであった共通テストですが、多くの変更が生じた2021年度の共通テストは、最終的にどのような試験になったのでしょうか。

右図は、大学入試センターがまとめた「センター試験からの変更点」です。記述式問題の導入は中止となりましたが、「思考力・判断力・表現力」の評価を重視することに変更はありませんので、その影響が注目されました。センター試験とは異なる素材・問題設定・問いな

共通テスト – センター試験からの変更点 –	
数学	数学① 試験時間60分⇒ 70分
理科	理科② 選択問題は 設定なし
英語	<ul style="list-style-type: none"> ◆英語(筆記)⇒英語(リーディング) ◆発音・アクセント・語句整序などの単独問題は出題なし ◆場面設定によってはイギリス英語の表記を使用 ◆リスニングは音声を2回流す問題と1回流す問題を出題 ◆配点 リーディング200点⇒100点、リスニング50点⇒100点
成績	全体における各受験者の位置づけを示す「段階表示」の大学への提供
方針	思考力、判断力、表現力 等を発揮して解くことが求められる問題の重視

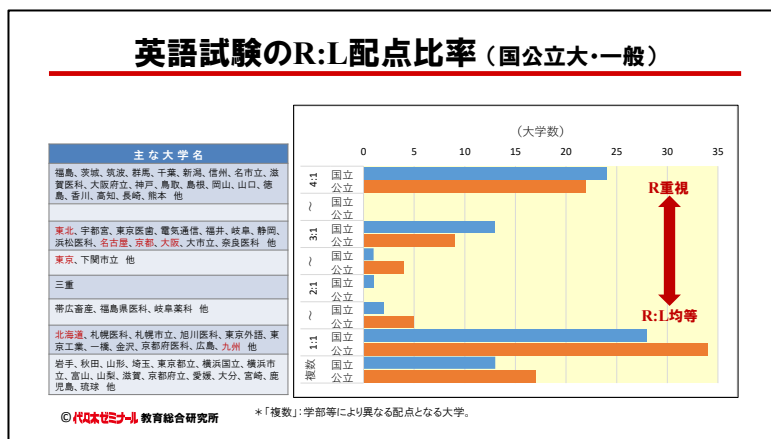
© 代ゼミナール 教育総合研究所 (令和3年度大学入学共通テスト 受験案内より)

などに対応する必要があります。また試験時間や問題構成などの形式的な変更があります。もう一点注目すべきは、英語です。リスニングに「問題の数の充実をはかるために」1回読みの問題が含まれることに加えて、リーディングとリスニングの配点比率が均等になり、各大学はそれぞれが決定した重みづけで選抜を行います。

各大学のリスニングの重みづけ

次図は、国公立大学の一般選抜について、共通テストのリーディングとリスニングの配点比率をまとめたものです。学部や方式で異なる配点比率をとる大学に関しては、一番下に「複数」としてまとめてあります。リーディングとリスニングの比率をリーディングの比率が高い順に上から並べています。最も多いのは下から2番目のR:L=1:1のグループになります。次に多いのは一番上のR:L=4:1のグループです。配点パターンは、各大学が入学時点で受験生に求める英語の能力像を反映していると考えられます。

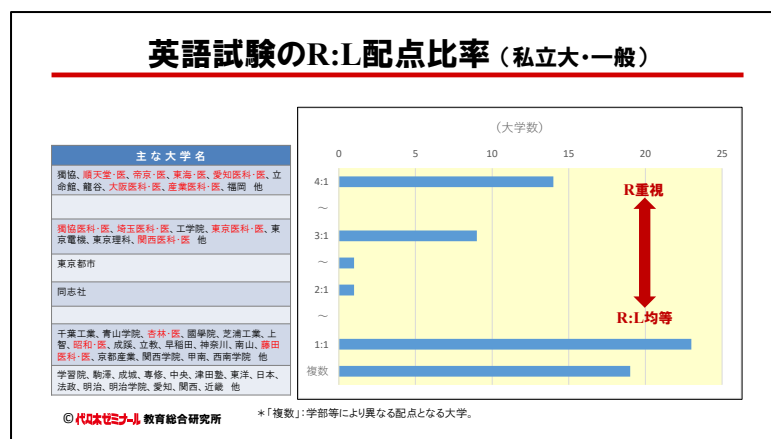
R:L=1:1のグループには、外国語大学や医科大学に加えて多くの公立大学が含まれています。このグループは、「読む」と「聞く」を均等に評価します。つまり、このグループの大学は入学時の英語力に関して従来通りの「読む」力だけでなく、「聞く」、そして恐らくはその先の「話す」や「書く」を含めた総合的なコミュニケーション能力、すなわちよりバランスの取れた受信力と発信力の双方を求めていると考えられます。



次に学校数の多い4:1のグループには多くの国立大学が並んでいます。このグループはセンター試験の時と同じ比率で評価を行いますので、従来の選抜ノウハウを活かすこともできると考えられます。これらの大学では、受験生にはまず学問の基礎能力として、英語の教科書や論文をきちんと読み込める力を示してほしいと考えているのだと思われます。

このグループに近い配点である3:1のグループには旧帝大（赤字で表示）が多く含まれています。これらの大学では様々な分野で最先端の研究が行われていますが、やはり研究能力の基礎力として、まずは正確な受信能力を重視していると考えられます。

私立大学に関しても、一般選抜で共通テストを利用する方式のある大学についてR:Lの配点比率を整理しました。こちらも大きくは1:1のグループと4:1または3:1のグループに分けられます。大学名を見ていきますと、1:1で評価するグループには、やはり



国際系の学部を有する大学を中心にコミュニケーションツールとしての英語力を求める大学が多い印象です。一方で医系の大学（赤字で表示）では英文資料を多く読みこむ必要性から、入学段階では読みの力を重視しているようです。

このように同じ共通テストのリスニングでも、大学ごとに利用法や重要性は様々です。センター試験を振り返りますと、リスニングの平均点は他教科と比較して変動幅が大きくなる傾向にありました。共通テストにおいてもこの傾向が続くのであれば、特に均等に評価す

る大学を志望する生徒にとっては影響が大きくなります。成績提供システムは延期になりましたが、共通テスト以外での民間試験の活用やそれに伴う 4 技能評価の動きは段階的に進んでいます。センター試験のリスニングをこれまで評価に加えていなかった東京大学も、共通テストに関してはリスニングを判定に加えました。入試全体におけるリスニングの重要性は今後も増していくと思われますので、先生方には情報を集めていただきつつ、リスニングに関する指導にも徐々に力を注いで頂ければと思います。

2021 年度大学入学共通テストの分析

【出願人数】

センター試験から共通テストにかけて出願人数に変化はあったのでしょうか。

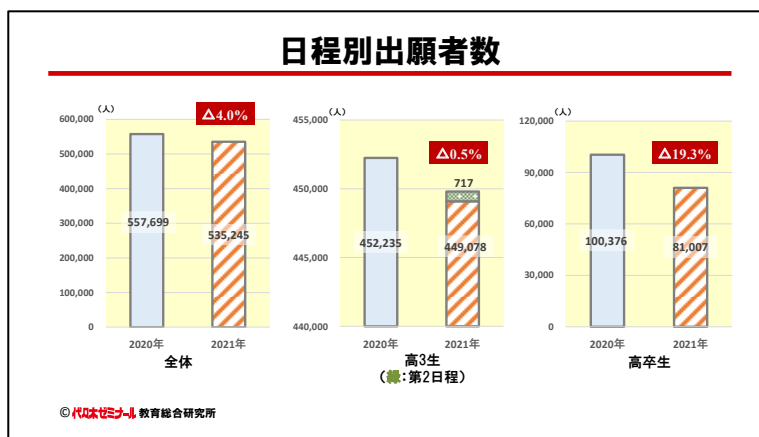
2020 年度センター試験と比較すると、共通テストの出願者数は全体で -4% の微減でした。ただし、高卒生については約 20% の大幅な減少となりました。これは、昨年度の受験生が新制度入試を

回避すべく、現役での合格・進学を重視したことによるものと思われます。高3 生についても、0.5% の減少となりました。18 歳人口そのものも減少していますが、共通テストを回避し学校推薦型や総合型選抜など共通テストを受験しなくても良い方法で進学を目指した生徒が一定数存在したと思われます。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う学習の遅れに配慮するため、今回の共通テストでは特例として高校 3 年生は二つの日程から受験日を選択することができました。文部科学省が 7 月に高 3 生に対して実施した事前の意向調査では、3 万 2 千人（約 7%）が第 2 日程での受験を希望していました。しかし大学入試センターが公表した資料によると、最終的に第 2 日程を選択した高 3 生は全体で 45 万人の内の 717 人（0.16%）にとどまり、ほとんどの高 3 生は第 1 日程で受験しました。これは、国公立大の個別入試や私大一般入試までの準備期間が短くなること、高校のカリキュラムの工夫により授業の遅れをある程度まで解消できたことなどにより、第 1 日程を選ぶ生徒が増えたものと考えられます。

但し、第 2 日程に関しては、第 1 日程の追試験としても位置付けられており、1021 名が追試験を受験しているため、結果的に一定数の生徒にとってセイフティネットとして機能したと評価できます。

今年の共通テストでは受験者数についても特徴がありました。出願したものの受験しなかった生徒の割合が例年と比較して増加しているのです。例年の欠席率は 5% 前後ですが、



今年は9.5%、例年のほぼ倍となる1割近くが欠席しました。また、受験者数を受験科目数別に見ると、特に3科目以下のいわゆる私大型受験者が前年に比べて約2万人、率にして15%も減少しています。この大幅な減少の理由としては、共通テストを受けるものの中には入試に使用しない「受けてみるだけ層」がコロナ感染の可能性を避けて今年は受験しなかったということもあったと思いますが、時期的に遅い共通テスト利用入試を避け、早い時期に他の選抜で決着をつけた私大受験層もかなり存在したのではないかと考えられます。

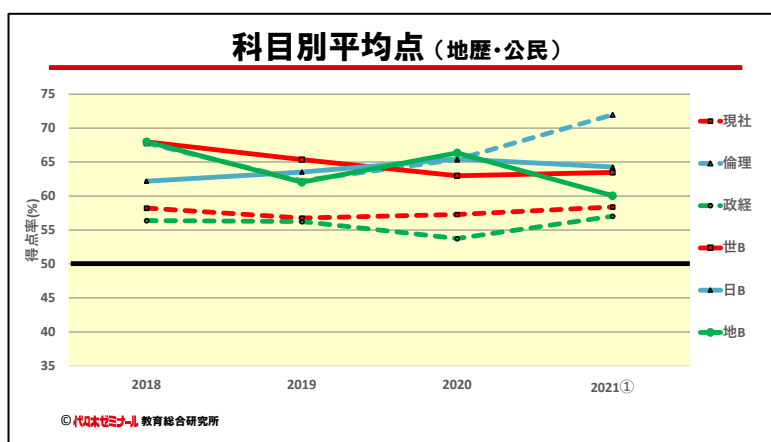
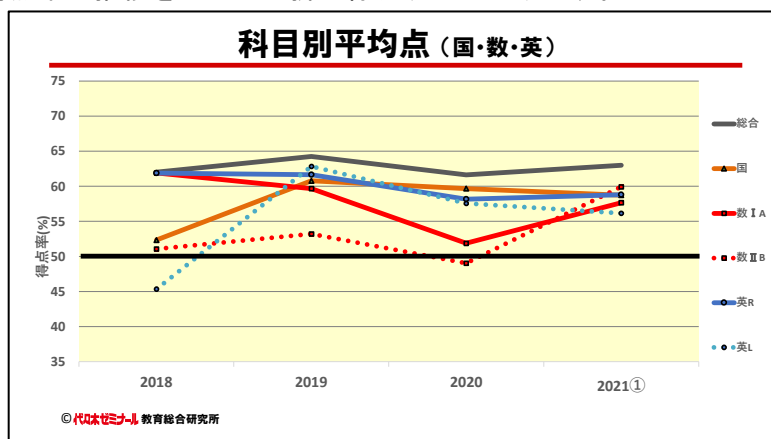
ここまでは共通テストについて試験前に判明していた情報からセンター試験との比較を行いました。ここからは、実際の共通テストの結果や内容について見ていきたいと思います。

【平均点】

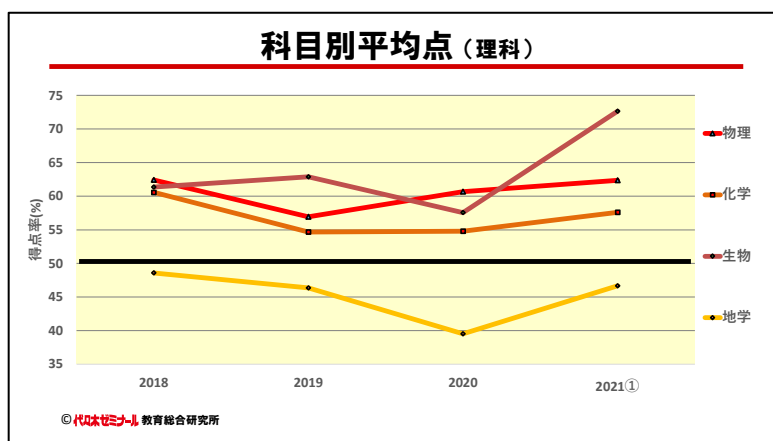
例年のセンター試験の平均得点率は6割程度を推移していましたが、共通テストでは思考力などが重視されるため、センター試験と比較して得点率が低下すると予想されていました。第2日程は受験者数が極端に少なく、比較するのは統計的に適当ではないため、第1日程で科目別平均点を比べたのが以下の3図です。2018年度センター本試験から2021年度共通テスト第1日程までの得点率の推移をまとめた折れ線グラフになります。

総合点と国語・英語・数学に関しては得点率55%から65%の間に位置しており、例年のセンター試験から大きな乖離は見られませんでした。

地歴公民に関しても、センター試験から平均点が大きく低下した科目はありませんでした。注意すべき点としては、倫理の平均点が突出して高くなったことで、現代社会、政治・経済が得点調整の対象となったことです。（「倫理、政治・経済」は調整対象外）



理科については、教科全体でセンター試験からの大きな平均点低下は確認されませんでした。理科でも得点調整が行われました。生物の平均点が高くなっており、化学、物理の2科目が得点調整の対象となっています。（「地学」は調整対象外）



このように懸念されていた共通テスト全体での平均点の低下は見られず、平均点は平年並み、もしくはやや上昇となりました。しかし「点数に変化がない=試験として変化がない」と決めつけることはできません。共通テストでは2回行われた試行調査の結果に基づき、試験内容に様々な調整が行われています。一部の科目ではそうした調整が円滑に行われなかった結果として平均点が上昇したのです。また、複数の科目で得点調整が行われており、科目間の公平性にも課題が残る状況ですので、次年度以降も難易度の調整については模索が続くと予想されます。平均点に関しても低下する可能性もありますので、ご注意ください。

【センター試験からの内容の変化】

代々木ゼミナールでは過去に行われた試行調査から、共通テストではセンター試験と比較して右図にあげた4つの変化が生じると予想していました。4つの変化とは、①会話形式の問題や複数テキストを課す問題を出題することで問題文量が増加する、②情報処理

共通テスト活用の影響予測

予想された出題の主な変化

- ① **問題文量の増加**
会話(対話)文による出題、実用的文書・資料による出題、複数テキストによる出題、など
- ② **問題設定の変化**
情報処理力の重視、日常的で身近な例・場面での思考
- ③ **素材の変化**
初見資料や身近な素材の採用、情報処理力の重視
- ④ **解答形式の多様化**
「マーク式」の改善 △

© 代々木ゼミナール 教育総合研究所

能力が要求される問題や日常的な学習の過程を意識した問題が出題されるなど問題設定が変化する、③問題設定が変化したことで問題の中で扱われる素材も変化する、④記述式問題や新傾向のマーク式問題が出題され解答形式が多様化する、です。このうち④については記述式の見送りに加えて、マーク式の改善に関しても課題が残ったため積極的に採用されず、センター試験同様にマークシートで択一式の問題を中心に解答することになりましたので、あまり変化がありませんでした。

こうした変化の背景は、共通テストの作問方針に説明されています。右図は2020年6月に大学入試センターが公表した2021年度共通テストの最終的な問題作成方針です。センター試験の作問のノウハウをいかしつつも「思考力、判断力、表現力を問うこと

大学入学共通テスト問題作成方針

《問題作成の基本的な考え方》

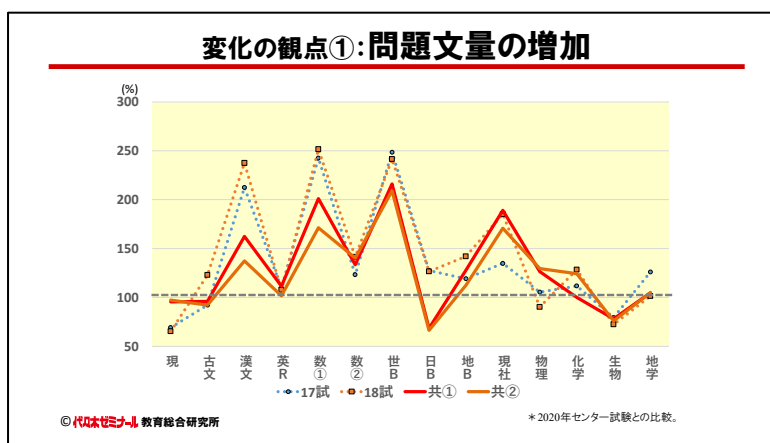
- ① 大学入試センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、共通テストで問いたい力を明確にした問題作成
- ② 大学教育の基礎力となる**知識・技能**や**思考力**、**判断力**、**表現力**を問う問題
- ③ 「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定：**授業**において生徒が学習する場面や、**社会生活**や**日常生活**の中から課題を発見し**解決方法を構想する場面**、**資料**や**データ**等を基に**考察する場面**など、**学習の過程**を意識した問題の場面設定

(2020年6月30日 大学入試センター発表)

© 大学入試センター 教育総合研究所

(要求する力)」、「学校や生活の中での学びや実際の資料やデータをもとにした考察などより現実的な学習を意識した場面を設定すること(評価の場面)」という2つの方針の変化があるのです。こうした作問のねらいによって、共通テストでは上記の3つの変化—問題文量の増加、問題設定の変化、素材の変化—が生じました。それぞれの変化について順に確認していききたいと思います。

まず、問題文量の増加についてです。右図は試行調査(2回)と共通テスト(2日程)の問題文量について行数を基準にカウントした結果を整理したデータです。横軸に科目をとり、問題文量を縦にとっています。基準として2020年センター試験の問題文量を



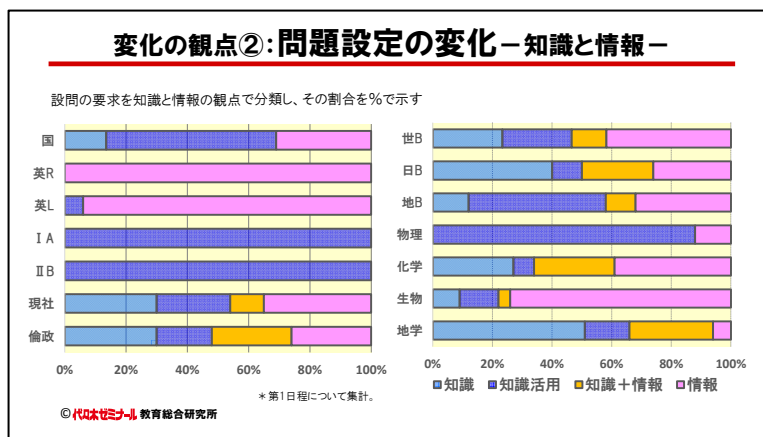
100%として破線で示しています。まず、試行調査の問題文量(破線)はセンター試験と比較して非常に多くなる傾向にありました。数学I A、漢文、世界史Bなどの科目では問題文量はセンター試験と比較して2.5倍程度になっています。この背景には、複数テキストによる出題や問題設定を工夫したことによるリード文の長文化があります。こうした問題文量の増加は受験生にとって負担が大きいという指摘もあり、共通テスト(実線)では平均点に配慮した調整が行われました。試行調査から共通テストにかけては問題文量の減少が見られます。しかし、共通テストとセンター試験で比較すると問題文量が2倍になっている科目もあり、やはり共通テスト全体で問題文が長文化する傾向が見られました。こうした長い文章には問題を解くうえで必ずしも必要のない情報も含まれています。共通テストでは、与えられた多くの情報から必要な情報を素早く選び出す情報の取捨選択を行う能力が必要とな

ります。

2つ目は問題設定の変化です。問題設定に関しては、センター試験から共通テストにかけて「試験で求められる能力」と「能力を評価するための場面」に変化があります。

能力については、問題の作成方針の「基本的な考え方」にもあったように、ひとつは「知識を用いる力」で、もうひとつは「情報（データ）を用いる力」に分けて見る事ができます。実際の問題の中では、

「知識そのものを問う設問」、「知識を活用して答える設問」「問題文中の情報を検索して答える設問」、そして「問題文中の情報と学んできた知識を組み合わせる設問」などが出題されています。この4つのパターンで第1日程



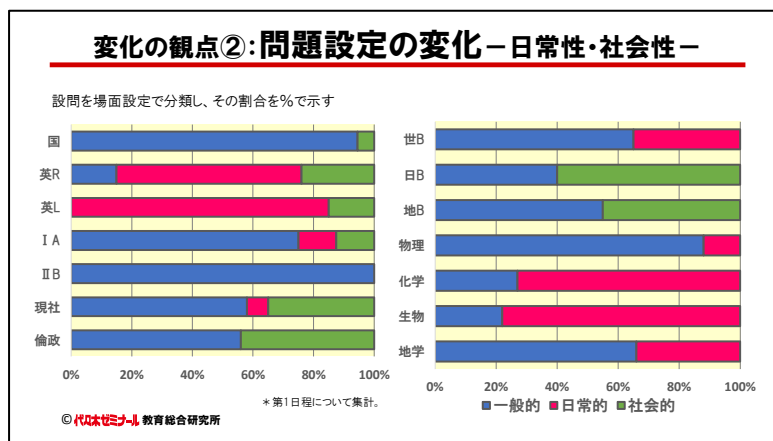
の各科目の設問を配点割合で分類した結果がこの図です。

数学 I A・II B、物理など抽象度の高い科目はこれまでのセンター試験同様「知識」関連の出題が中心となっていますが、それ以外の科目では「情報検索」（ピンク色）あるいは「情報と知識の統合」型（黄色）の設問もかなりの配点割合で出題されています。

このように共通テストでは広い意味での「情報処理能力」が重要となるのです。

続いて、問題の場面設定の変化についても見ていきたいと思います。センター試験の出題は、従来の問題集などに掲載されている一般的な場面設定のものが多くなっていました。共通テストでは、これとは異なる日常的な場面設定や社会的な場面設定の問題が多く出題されました。日常的な場面設定の問題とは他者との交流や生活の中での学びを想定した問題、社会的な場面設定の問題とは実社会のデータを扱う問題や社会問題を題材にした問題です。

右図は第1日程の問題をこうした問題の場面設定に関する観点から分類してそれぞれがどの程度の配点を占めているかを示した帯グラフです。科目ごとに状況は異なりますが、英語や化学、生物では日常的な場面設定の問題が多く

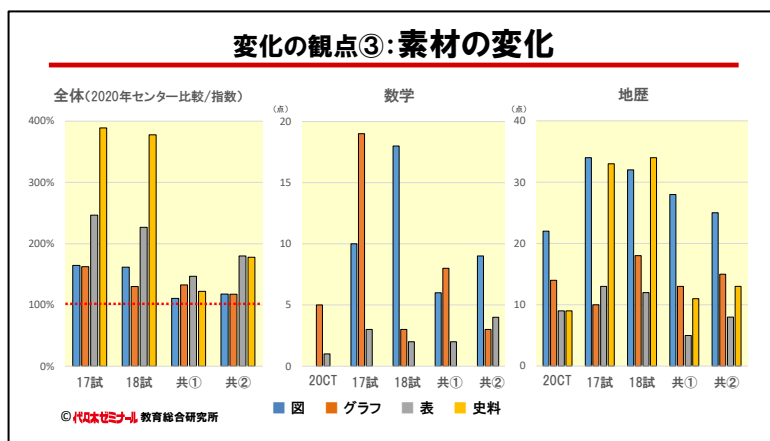


出題されており、特に英語で日常的な場面設定の問題が増えたことは、より実践的なコミュニケーションツールとしての英語力を評価しようという意図のあらわれと考えられます。社会的な場面設定の問題に関しては地歴公民を中心に試験されていますが、英語のリーディングでも社会問題として甘味料を題材とした出題が見られました。

共通テストに向けた対策としては、抽象性の高い理数科目では、学習内容を日常生活にあてはめてその有用性を認識させる、地歴公民科目では学んだことを切っ掛けに現実の社会的課題を分析したり、解決方法を検討させるなどの指導が有効と思われます。

このようにセンター試験から共通テストにかけて「求められる能力」と「評価の場面」について問題設定の変化が見られました。こうした問題設定の変化に伴い問題の中で採用される素材（視覚資料）についても変化が見られました。

右図は試行調査と共通テストに登場する視覚資料を図・グラフ・表・史料の4つに分類し、その数をカウントした縦棒グラフです。一番左が試験全体の状況を比較したグラフです。全試験で各素材を表わす棒が赤い破線（基準である2020年センター試験に



おける資料の数に対応)を超えて伸びていることから、センター試験と比較して試行調査や共通テストではより多くの視覚資料が登場したことが確認できます。ただし、センター試験から共通テストへの変化に注目すると、科目ごとに方向性が異なります。上図中央が数学の視覚資料についてまとめたデータです。センター試験の数学ではグラフ（橙色）と表（灰色）が用いられていましたが、試行調査や共通テストではそれに加えて図（青色）が採用されています。このように数学ではセンター試験から共通テストにかけて素材の幅が広がったと言えます。一方で、地歴に関しては異なる傾向が見られました。上図右が地歴に関するデータです。地歴についてはセンター試験と共通テストを比較すると視覚資料の種類には変化はありませんが、総点数が増えています。つまりセンター試験から共通テストにかけて素材の量が増えたということです。このように科目ごとに違いはありますが、センター試験から共通テストにかけて試験全体で扱われる素材の幅と量が増えたことが分かります。また、新しく採用された素材の中には教科書や資料集には掲載されておらず、受験生が初めて見るであろうものも含まれていました。共通テストにおいては、初見の資料についてその意図を解釈する能力も求められています。この点についてはICTの活用なども有効と考えられます。

【共通テストの特徴的な出題】

センター試験に比べ共通テストでは思考力や判断力が重視されますが、具体的にどのような思考力や判断力が求められるのか、それが明確に表れた出題の例です。新傾向の出題について大きく5つの特徴にまとめ、それぞれに該当する問題例をご紹介します。

共通テストにおいて重視されるようになった1つ目のポイントは「具体と抽象を行き来する力」です。

右表には、これに該当する問題例を3つあげていますが、このうち第1日程 数学ⅠAの第2問を例に挙げて説明いたします。この問題では、100メートル走を題材にタイムを最短にするにはストライド（歩幅）とピッチ（歩数）をどのように調整すれば良いか考えます。まずストライドを x 、ピッチを z とし、与えられた表から x と z に関する一次式を作ります。 x と z の積は速度であり、タイムを最短にするには速度を最大にすればよいので、

前述の一次式を利用することで最終的に x に関する二次関数の最大値を求める問題として考えることができます（問題文中には、「二次関数」という言葉も数式も使われていません）。この問題は具体的なデータから数式を導き（抽象化）、更にその数式を活用することで求めたい具体的な解決策を決定するというものです。こうした問題に取り組むことで受験生は一度具体例を一般化してしまえば、その結果を様々な具体例に改めて応用することができるという一般化の効力に気づくことができます。

共通テスト 特徴① 「具体⇔抽象の往還で事象の本質を捉える」

日程	科目・問題	内 容
1	数ⅠA 【第2問】	ストライド(x)とピッチ(z)について表のデータから関数を導き、その関数を用いてタイムを最小にするための条件を考察する。
1	地理B 【第2問】 【問3】	原料輸送費(a)と製品輸送費(b)の関係から、総輸送費($a+b$)が最小となる建設予定地を選ぶ。
2	現社 【第2問】 【問4】	コンビニ強盗の事例をもとに、抽象的な「権利規定」が保障された具体的行為を抽出する。

© 代ゼミナール 教育総合研究所

共通テスト 特徴① 「具体⇔抽象の往還で事象の本質を捉える」

第1日程 数学ⅠA 第2問

100メートル走を題材にタイムを縮めるためのストライド(x)、ピッチ(z)の条件について考える

	1回目	2回目	3回目
ストライド(x)	2.05	2.10	2.15
ピッチ(z)	4.70	4.60	4.50

$z = -2x + 8.8$

タイム(秒)は100mをストライド(x)とピッチ(z)の積で割ったものであるから、タイムがよくなる(最小となる)条件を見つけるためには、速度(xz)の最大値を考えればよい。

$xz = x(-2x + 8.8)$
 $xz = -2x^2 + 8.8x$

データ(具体例)から数式を導き(抽象化)、その数式を応用してストライドとピッチの条件(具体的な結論)を決定する。

© 代ゼミナール 教育総合研究所

2つ目のポイントは「統合的な思考力」です。第1日程のリーディング第4問を例に挙げて説明いたします。この問題は姉妹校からのゲストを歓迎するために先生と生徒が相談しているという設定でした。受験生には生徒と先生がそれぞれに宛てたメールやそれに添付されたデータが与えられ、それをもとにどのスケジュールが正しいか、どのプログラムが良いかといった問に答えていきます。こうした問題に取り組む際に必要となるのが、様々な場所に様々な形で散りばめられた情報を集め、それらを統合して必要な考えをまとめるという統合的な思考力です。

共通テスト 特徴② 「統合的な思考」(複数テキスト・分野横断的出題)

日程	科目・問題	内 容
問題例	1 国語【第1問】[問5]	本文とは異なる引用文が示され、本文の内容と合わせて考察する。
	1 英語R【第4問】	2通のメールと添付された資料を読み込み、情報を整理して回答する。
	2 日本史B【第2問】[問3]	提示された「史料」+「表」に日本史の知識(仏教史)を加えて、正しい選択肢を選ぶ。
	2 現社【第1問】	祖父母の住む農村に出かけた場面で、「費用概念」「バリエーション」「民法」「高齢化」「公益性」「心理(欲求)」「農業問題」「思想(思想家)」などの多様なテーマについて問う。

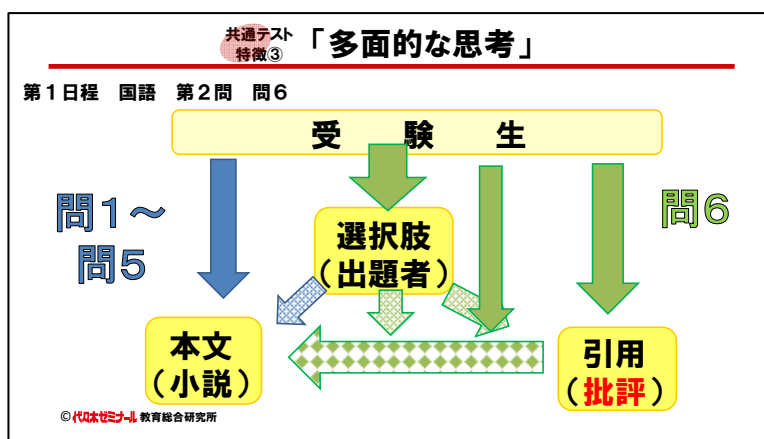
© 代ゼミナール 教育総合研究所

3つ目のポイントは「多面的な思考力」です。ここでは第1日程国語第2問[問6]を例に挙げて説明いたします。小説問題の問6で、本文に対する批評が資料として与えられました。ここで重要なのは、批評が与えられたことにより発生した読解の視点の変化です。問1から問5までは、受験生は本文と、出題者が本文を踏まえて用意した選択肢を読みながら自分の考えを整理していきます。問6ではそこに批評が加えられます。まず、受験生は批評を読みますが、批評が本文に対してどのような視点からどのような内容を述べているかも意識しなくてはなりません。また、選択肢についても本文の内容、批評の内容、そして本文と批評の関係を踏まえて作成されているため背景がより複雑になって

共通テスト 特徴③ 「多面的な思考」

日程	科目・問題	内 容
問題例	1 国語【第2問】[問6]	本文に対する批評が資料として与えられる。
	1 世界史B【第3問】[問8]	改ざん前後の文章を比較して、改ざんの意図を考察する。
	2 現社【第3問】	史料(終戦直後の公文書)の記述に関して、「当時の状況」「その後の推移」「関連知識(社会保障)」「現代との共通性」など、多面的に考察する。

© 代ゼミナール 教育総合研究所



います。受験生はこれらを踏まえて自身のここまでの考えを修正・調整する必要があるので、より多くの視点からの多様な見方を通じて考えを深める多面的な思考力が要求されます。

こうした多面的な思考力というのは実社会でも必要とされる能力です。周囲と協働する時に、全員の考えが一致することはまずありません。そうした状況下で他者の意見を否定せず、認めた上で議論し集団としての考えを深めることが重要になるのです。

4つ目のポイントは「情報を収集し整理する能力」です。第1日程日本史B第3問を例に挙げます。この問題では古い地図が与えられており、指示に従っていくつかのポイントを結ぶことで当時の荘園の領域を大まかに把握する事が出来ます。こうした問題

共通テスト 特徴④ 「情報を収集・吟味し、整理する」

日程	科目・問題	内 容
問題例	1 英語R 【第3問】 [A]	テキストと図から情報を集め空港からホテルまでの所要時間について複数の乗り継ぎ経路を比較する。
	1 地理B 【第1問】 [問2]	地図が与えられず、会話と図中の情報から土地の位置と気候区分を考える。
	1 日本史B 【第3問】 [問1]	提示された手順で作業することを通じて、古地図を読みとる。
	1 現社 【第3問】 [問6]	提示された財・サービスをその性格から判断して、2つの観点で分類した表に位置づける。

© 代ゼミナール 教育総合研究所

では、文章だけでなく視覚資料からも情報を集めそれら进行处理して整理する、情報に関する能力を評価することができます。

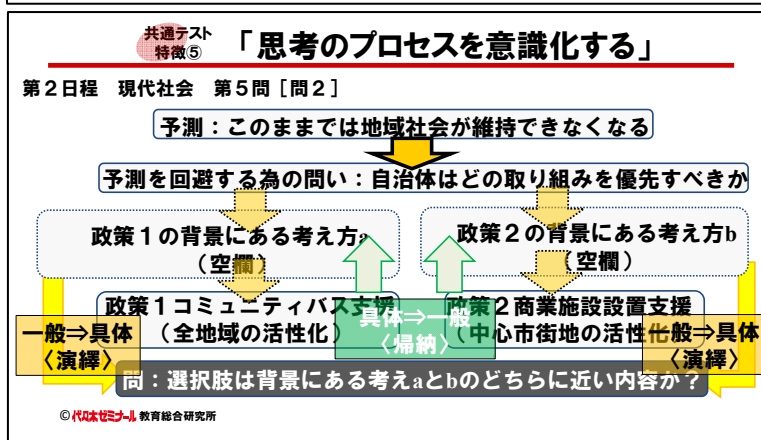
5つ目のポイントは「思考の過程を意識する力」です。第2日程の現代社会第5問〔問2〕を例に挙げます。この問題では地方自治に関する事例が右下図のような模式図で示されます。地方自治において、具体的な政策を決定した事例のプロセスを表した図です。1つ目の政策は全ての地域を活性化させるためのコミュニティバス設置、2つ目の政策は中心市街地を活性化させるために商業施設を設置することです。2つの政策はともに地域社会の維持を目的としています。財源の使い方や自治体が果たすべき役割の認識など政策の背景にある考え方が異なっています。そしてこれらの背景にある考え方aとbについては問題中では空欄になっており、明らかにされていません。ここまでを前提として問題では自治体の役割についていくつかの意見が選択肢として与えられ、それらが背景にある考え方aとbのどちらに近いかが問われます。この問題を考えるためには、まず、通常思考プロセスとは逆の方向に、具体的に与えられている政策1と2から考え方aとbを帰納的に推測します。その上で、推測された考え方とそれぞれの選択肢の具体例を照らし合わせていくという演繹的思考も求められるのです。

従来のセンター試験でも思考の結果を評価する問題は出題されてきました。しかし、共通テストでは本問のように思考の過程そのものを評価することが出来る問題が出題されています。このことから共通テストでは、異なる思考を適宜切り替えながら思考のプロセスを段階的に整えていく論理的な思考力が重要視されていると思われます。

共通テスト 特徴⑤ 「思考のプロセスを意識化する」

日程	科目・問題	内 容
問題例	1 数ⅠA 【第3問】	(1)で具体的な確率を求め、(2)以降では結果の振り返り⇒考察⇒一般化⇒応用、と考えを進める。
	1 物理 【第3問】	図を参考に光の屈折について考えつつ、入射角と反射角の関係を踏まえて、ダイヤモンドが明るく輝く理由を求める。
	2 現社 【第5問】 【問2】	自治体が取べき複数の政策案について、その背景にあると思われる考え方を推定し、その考え方に合致する選択肢を選ぶ。

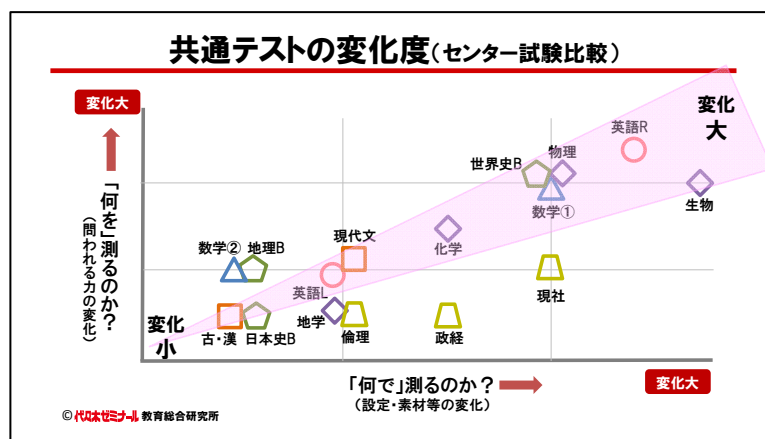
© 代々木ゼミナール 教育総合研究所



【科目ごとの変化】

センター試験から共通テストにかけて内容面の変化があることが確認できました。それらを整理して科目ごとにセンター試験から共通テストにかけてどの程度変化したかをまとめてみたいと思います。

右図は代々木ゼミナールの分析に基づき、センター試験から共通テストにかけての各科目の変化の程度を整理した図です。横軸に「何で能力を測るのか（設定・素材の変化）」を、縦軸に「何を測るのか（問われる力の変化）」をとって、右上にある科目ほ



どセンター試験からの変化が大きく、左下にある科目ほどセンター試験からの変化が小さい科目となっています。但し、センター試験からの変化の大小と共通テストらしさに単純な相関はありません。例えば地理Bや日本史Bではセンター試験の時から共通テストの作問方針に近い出題が行われていました。結果としてセンター試験からの変化はあまり見られませんが、共通テストの方針に合致した問題となっています。世界史Bは試行調査や直近のセンター試験でも出題傾向に変化があまり見られず、共通テスト本番で大きく出題傾向が変化しました。変化の大きい科目の一つである生物には課題が残ります。生物は直近のセンター試験でも積極的に新傾向の問題が採用されており、共通テストにおいては更に新しい素材や場面設定が盛り込まれました。一方でそれらに対する配慮と思われる問題量の減少や選択肢の短文化・易化も見られ、結果的に平均点が大きく上昇し難易度の調整が不十分であったことが分かりました。

こうして整理しますと科目ごとに差はあるものの、やはりセンター試験から共通テストにかけて明確な変化があったことが確認できます。ただし、出題については今後も試行錯誤が続くと思われます。したがって、求める力と出題形式の関係が固まるまでには、もうしばらく時間が必要と考えられます。

共通テストを意識した指導法

このようにセンター試験から変化のあった共通テストですが、指導法についてはセンター試験のものから変える必要があるのでしょうか。

繰り返しになりますがセンター試験から共通テストにかけて出題傾向に変化がありました。そして、その背

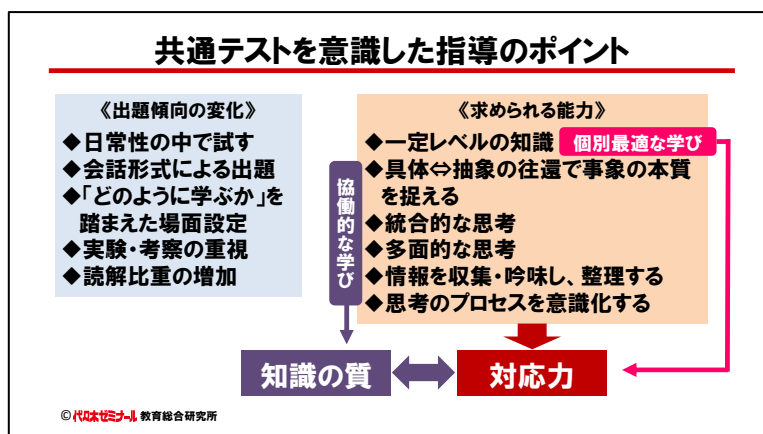
景には試験において求められる能力や場面の変化があります。知識を評価することが中心だったセンター試験に対して、共通テストでは知識を使いこなして新しい状況や物事に対応していく力が重視されるのです。センター試験に対しては、事前に生徒に様々な知識を覚えさせることで比較的容易に準備をおこなうことができました。しかし、思考力・判断力・表現力も求められる共通テストに関しては異なるアプローチが必要になります。

共通テストを意識した生徒指導において重要なポイントは2つです。1つ目は個々の生徒に対して知識の確実な定着を図る観点で重要となる「個別最適な学び」の実現です。思考力・判断力・表現力を重視するといっても、その前提として一定の基礎的な知識が必要になります。思考力などを高めるためにも、これまで以上に一人一人の基礎的な知識の定着に目を配る必要があります。「個別最適な学び」とは、この定着を目指す「個へのまなざし」を重視した学びの形です。

2つ目に、そうした知識を活かせる形で身につけることが重要になります。なぜなら柔軟な対応力は知識の量だけでなく質にも左右されるからです。個々の生徒の学びの枠を超え、集団としての「協働的な学び」を通じて知識やものの見方を広げたり深めたりすることで、知識の質が高まり、生徒の対応力向上が期待されます。こうした指導において必要なのが「集団へのまなざし」です。

この2つのアプローチを統合することで、最終的には生徒自身の主体的な学びや未知への積極的な挑戦が喚起されると期待されます。

以上の結論はここまでの分析を整理して導かれたものですが、実はこうした内容は新指導要領においても重視されているものです。では、なぜ現時点の共通テストが新指導要領に対応した特徴を示すのでしょうか。その背景には、新指導要領に先行して入試を変化させることで、高校教育の変化をよりスムーズにしようという意図があるのではないかと考えられます。



今後の共通テスト

センター試験からの移行にともなう様々な混乱に加え、新型コロナウイルスの影響で大混乱した共通テスト初年度はこのように行われ、終わりましたが、ここからは共通テストの今後について見てみましょう。

まず、来年 2022 年度につ

いてですが、既に問題作成の方針が公開されています。その内容は 2021 年度のものと同様の内容でした。このことから 2022 年度の共通テストにおいても、今回の結果にもとづき若干の修正はありうるものの、今年見られた傾向や特徴が踏襲されると考えて良いでしょう。

一方で、共通テストを利用する大学が拡大する可能性を考えておく必要があります。2021 年度入試では、これまでセンター試験を利用していなかった上智大と学習院大が新たに共通テストの利用を始めました。早稲田大、上智大、青山学院大では共通テストと独自試験の成績で合否を判定する方式が始まり、立教大は文学部を除き英語については独自の試験を行わず、受験生は共通テストか民間英語試験を利用することになりました。

また、緊急時には共通テストの成績で合否が判定されるケースもあります。2020 年度の入試においても 3 月の試験の一部はコロナウイルス感染拡大の影響を受けており、北海道大など一部の国公立大学では後期試験をセンター試験の成績のみで判定しました。2021 年度入試でも横浜国立大は、面接などを除き個別学力検査を行わず、共通テストの成績をもとに合否を決定しました。また一般選抜直前の 2021 年 2 月に東北を震源とする地震が起きた際に、早稲田大は現地の受験生の移動が困難な場合は共通テストの成績で合否を決定すると公表しました。このような動向を考慮すると、共通テストに関しては、様々なリスクを回避できる選択肢を増やすためにも可能な範囲で受験させるべき試験と捉えるのがよいのではないのでしょうか。

共通テストは、新しい学習指導要領の学力観を一部先行する形で始まりましたが、2025 年度からはこの新指導要領に完全に準拠した形で実施されます。2025 年度の共通テストについて 21 年 3 月末に大学入試センターが公式の実施案を示しましたので、簡単に整理させていただきます。実施案では、新指導要領で必修となる「情報」や「公共」を新しいテスト科目として新設する一方で、現在課題となっている試験のスリム化については受験者数の少ない科目を廃止したり、地歴公民、数学、理科の科目を再編することで、現在の 6 教科 30

これからの共通テスト

- ◆2022年度方針:2021年度から大きな変更なし
- ◆利用拡大:2021年度は上智・学習院が新規利用
緊急時は共通テストで判定のケースも
総合型・学校推薦でも利用を推奨

- ★2025年度(検討中)
6教科30科目⇒7教科21科目
新設(情報、公共)+再編(数学、地歴、理科)

©代ゼミエデュケーション 教育総合研究所

科目を7教科21科目にするとあります。

①「情報」の新設について。

プログラミングや情報通信ネットワークの活用について学ぶ「情報」の教科新設に関しては、急速な情報通信技術の発達・普及が社会の変革を牽引する状況において、文系理系を問わず情報リテラシーの重要性が増し、読み書きや計算と同じく大切な基礎学力の1つに位置付けられたことの表れと考えられます。共通テストにおいては教科の性質上パソコンやタブレットの活用が適当とされていますが、現状では端末を使用する場合、全国的に均質な受験環境の確保が難しく、機械的なトラブルを完全に防止することも困難であるため、公平性の観点からマークシートでの試験実施が想定されています。

②地理歴史、公民について。

地歴公民については、科目編成が変わります。また、試験科目としては地歴科目同士、公民科目同士、そして地歴科目と公民科目の組み合わせで6つの試験科目として編成する案となっています。新指導要領では、公共は現代社会に代わる公民の必修科目となります。従来の現代社会では、社会の仕組みなどを客観的に学ぶことができますが、「そうした社会においてどのように行動するのか」という視点に欠けるのではないかという認識があり、社会に主体的に参画できる力を養うことを目指す「公共」が導入されます。扱われる知識事項の種類に関しては現代社会から大きな変化はありませんが、「思考力・判断力・表現力の定着」を目指す観点から、調査や発表など学習の方法は大きく変化すると考えられます。共通テストに関しては、現代社会の流れを汲むことになると予想されますので、指導法研究の際には現代社会の指導をベースに、現実に社会問題となっている今日的なテーマについてどう向き合っていけばよいのかという視点で考える訓練をしていただければと思います。

③数学について。

実施案では、数学の試験科目は「数学Ⅰ」「数学Ⅰ、数学A」「数学Ⅱ、数学B、数学C」の3科目となります。「数学Ⅱ、数学B、数学C」の出題範囲のうち、「数学B」及び「数学C」については、「数学B」から数列・統計的な推測の2項目、「数学C」からベクトル・平面上の曲線と複素数平面の2項目がそれぞれ出題され、このうち3項目を選択し解答します。文系受験生も出願校によっては数学Cを履修する必要があるということです。

なお、受験者が少なかった「簿記・会計」と「情報基礎」は廃止されます。

④理科について。

独立した基礎4科目を1つにまとめて5科目に集約する案となっています。

⑤外国語（英語）について。

共通テストへのスピーキングやライティングの導入は想定されず、従来通りの2技能での試験が提案されています。

ここに掲載した内容は大学入試センターとしての一定の結論であり、正式な決定ではありません。今後、この案を踏まえた上で文科省において高大の関係者などとの協議を経て、

今年の夏までに 2025 年度大学入学共通テストの出題教科・科目が正式に決定されます。

3. 新制度入試② —— 入試区分の変更

区分変化の意味

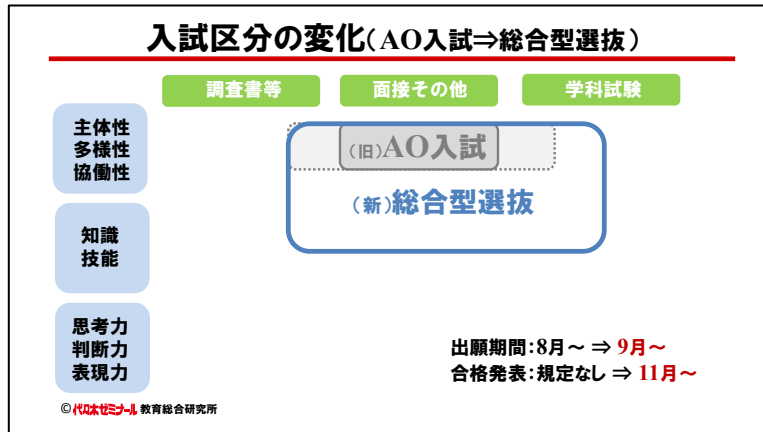
ここからは、2つ目の観点である入試制度の変更が入試に与えた影響について見ていきたいと思います。新しい入試制度では、入試の区分が変わりました。ここまで見てきた共通テストは、「これまで評価できなかった力を評価したい」という意思の表れと捉えることができます。入試区分の変化についても、これまでの入試では十分に実現できなかった多面的・総合的評価を実現したいというメッセージが込められています。

この図は各入試区分のねらいを「評価したい力（縦軸）」と「評価の方法（横軸）」の2つの側面から表した模式図です。従来入試区分と新しい入試区分を対比して描いています。

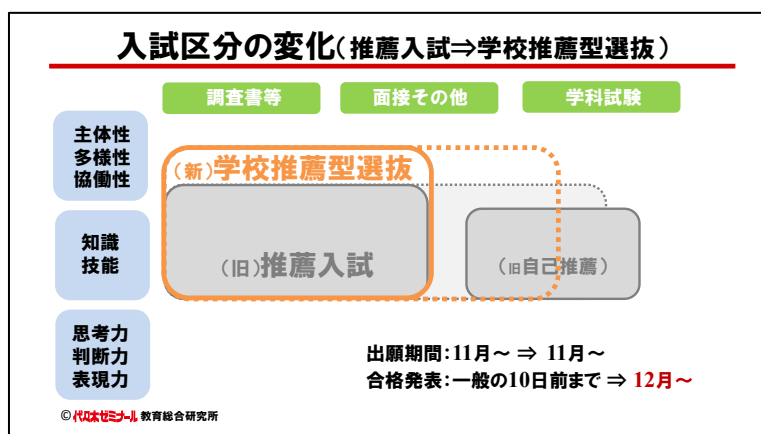
最初にこれまでの「AO入試」と新しい「総合型選抜」を比較します。AO入試では面接などを中心に、大学と受験生のマッチングを重視した選抜が行われていましたが、2つの問題点を抱えていました。1つ目は、一部の大学の選抜では学力の評価などが十分でなく軽量の選抜となっていたことです。2つ目は、合格発表の時期が指定されておらず、入試が早期化してしまったことによる高校教育への悪影響です。

こうした指摘を踏まえて総合型選抜においては、基礎的な学力の確認を必須とし、より幅広い能力や資質も多面的に評価するほか、より多様な選抜方法を工夫することが求められています。また入試日程に関して

も出願・発表ともにAO入試よりも繰り下げて、高校教育への影響が緩和されるよう配慮されています。

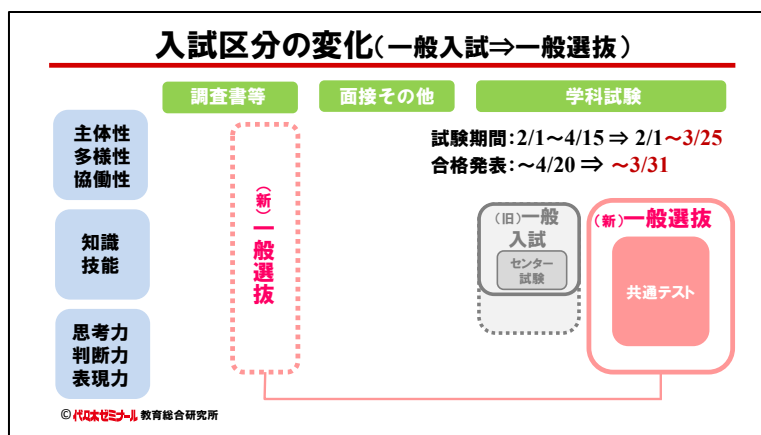


2つ目は、「推薦入試」と「学校推薦型選抜」の比較です。推薦入試に対する批判としては、私立大学を中心に「青田買い」の手段となっているというものがありません。また「自己推薦入試」は広く実施されていましたが、その実態は一般入試「0期試験」とでも称すべきものでした。



学校推薦型選抜ではすべて「校長先生の推薦」を要件とすることで、「自己推薦」をこの枠から排除しました。また、「多面的な評価」を促す意味で、「主体性、多様性、協働性」などの資質も積極的に評価する方向が示されています。「基礎的な学力」を条件とする点は、総合型選抜と同じです。入試日程についても、合格発表を12月以降と指定することで、入試の早期化に一定の歯止めをかけています。

最後に「一般入試」と「一般選抜」の比較です。一般選抜については、学科試験を中心とする点は従来の一般入試と同じです。ただし、一般選抜においては調査書などを活用し、可能な限り学科試験に偏らず「主体性など」を含む幅広い能力・資質も考慮し多面的な評価を図ることが求められています。また、学科試験においても、知識・技能に偏ることなく、「思考力、判断力、表現力」も重視する方向性が示されていて、既に述べたように共通テストもそうした方向で構想されています。入試期間については年度内に終了するように指定されていて、「入試の長期化」に歯止めをかけています。



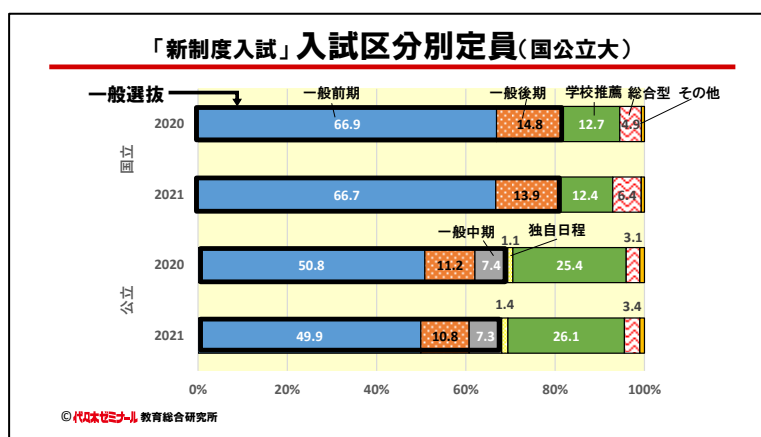
このように、新しい入試区分ではいずれもが「一定の学力」を前提としつつ、各区分において評価される能力や資質のバリエーションが広がることとなります。しかしながら、これらの規定には絶対的な強制力はなく、半ば大学の努力目標となっています。したがって、この考え方が本当に定着するかどうかは今後の課題と言わざるをえません。

募集人数への影響

ここまで見てきたように、新制度入試では私立大学を中心に見られる入試の早期化や軽量化、一面的評価といった傾向を改善することに重点が置かれています。ただし、前述の通りいくつかの事項については「努力義務」のレベルですので、すべての大学の入試がその方向にシフトするとは考えられません。そのような中で、今回変化が確認されたのが入試区分別の募集人数です。

下図は国公立大学の募集人数に関して、それぞれの入試区分の定員数がどの程度の割合を占めるかを前年と比較した帯グラフです。グラフ中の「その他」については帰国生や留学生向けの入試区分に対応しています。

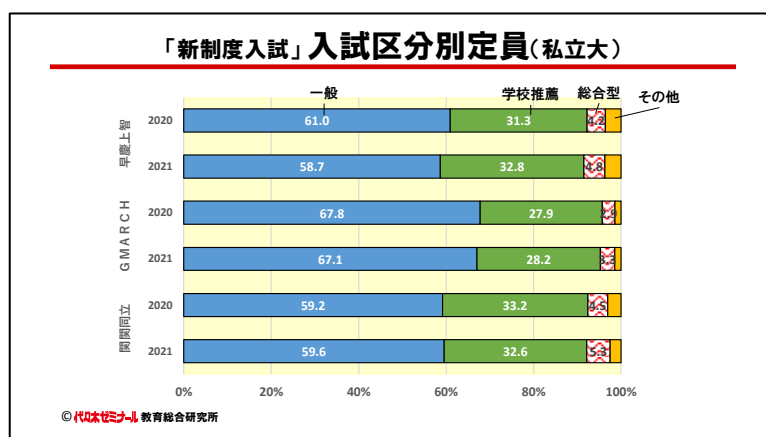
国立大学については 2020 年から 2021 年にかけて一般後期と学校推薦の割合が減り、総合型選抜の割合が増えていることが分かります。特に後期日程の募集を取りやめる大学は多く、例えば東京工業大と金沢大は後期日程を全廃しました。一方で総合型に関しては今後も募集枠



が拡大すると考えられます。国立大学協会は将来的に募集人員に占める学校推薦型と総合型の割合を3割程度まで引き上げることを目標としています。21年現在では学校推薦型と総合型を合わせて2割程度ですので、今後も総合型の割合が増えていくでしょう。

公立大学では国立大学と比較して一般選抜と総合型の割合が小さく、学校推薦型の割合が大きくなっています。20年から21年の変化として見ても、学校推薦型の割合が更に大きくなっています。公立大学は地域提携と地域教育を非常に重視していますので、学校推薦型の中の地域枠制度を積極的に活用して、国立大学と競合しない形で地元の優秀な受験生を獲得しようとする意図があると考えられます。

私立大学については、国公立大学と比較して学校推薦型の割合がかなり大きくなっていますが、特に付属校や系列校からの内部推薦の割合が大きくなっています。私立大学の動向において注目すべきは総合型です。20年から21年にかけて全てのグループで総合型



の割合が増えています。総合型は面接なども実施する入試であり、大学の負担も大きくなりますが、3つの入試区分の中で最も早く実施でき、定員に制限のない選抜であるという利点もあります。入試に注力できる大学では今後も総合型選抜を積極的に活用し、早期に多様な入学者を確保しようとするものと予測されます。

4. 新制度入試③ —— 多面的・総合的評価

上記の通り、新制度入試は各大学の募集人員に影響を与えました。では、本来の目的である多面的・総合的評価を実現することはできたのでしょうか。最も難しいのは、学科試験主体であり、受験人数が非常に多い一般選抜です。

右表は全国の大学で21年度入試一般選抜における学力の3要素の評価に関する新動向を整理したものです。

2021年度一般選抜「多面的・総合的評価」	
【知識・技能・思考力・判断力・表現力】	
〈国公立〉	2次試験で、小論文・総合型問題・口述試験等の新規導入
〈私立〉	●主要大で新規に「共通テスト利用入試」を導入 ●共通テスト利用入試で、英語にリスニングを追加。
【主体性・多様性・協働性】	
〈国公立〉	●2次試験で面接の新規導入 ●多くの大学で提出書類(調査書・志望理由書・活動報告書等)を選抜で活用。活用方法としては、点数化(加点)、参考(ボーダーライン上での優先順位判定)などが主。 ●点数化の場合の配点は、2次配点の10%以内が大半。
〈私立〉	web出願の際に、「主体性」「多様性」「協働性」に関わる内容を申告。

①学力の3要素のうち、知識・技能と思考力・判断力・表現力については、国公立大で、2次試験における評価の多面性・総合性を

高める動きが見られます。小論文・総合型問題・口述試験など、学科試験とは異なる評価を新規に導入する動きです。私立大では、「思考力・判断力」も求める共通テストを利用する入試が増加しています。また、共通テスト利用入試では、これまで除外していたリスニングを追加する動きがあります。

②学力の3要素のうち、主体性・多様性・協働性については、多くの国公立大学が出願時に「主体性等の評価」の手段として、「調査書」「志望理由書」「活動報告書」等の書類の提出を求めました。募集要項では、これらの書類を「選抜に活用する」と記されています。そ

の活用法ですが、具体的な方法まで公表している大学は必ずしも多くはありませんが、概ね「点数化して加点する」方法と「ボーダーライン上での優先順位判定などの参考にする」方法に集約されます。また、点数化する場合は、2次配点の10%以内とする大学が大半です。10%とはいえ、2次試験は平均点が低いことを考えますと、決して小さな配点とはいえません。

次に私立大学の動向です。

私立大学で特徴的なことは、一般選抜で「主体性等の評価」を行うのはほぼWeb出願に限られることです。私立大学の一般選抜は受験者が多く、合否判定までの時間が短いという物理的な制約が強いため、人手を必要とせずデジタル処理が可能なWeb方式でのみ実施されています。ただし、点数化などの具体的な利用方法は示されておらず、どこまで判定に活用しているのかは不明です。

このように私大でも徐々に多面的・総合的な評価の動きが広がる可能性があります。この方針が強制力をもたない以上、あくまで「実施できる範囲で」「受験生獲得に不利にならない範囲で」、あるいは「新たな受験者層の開拓に資する」という条件の下でというのが、当面私大がとる方向ではないかと思われます。

すべての大学で、本当の意味での「多面的・総合的な評価」が定着するためには、学科試験以外の方法でしか評価できない資質・能力とはどのようなものであり、それはどのような方法で評価が可能なのかについて、大学と受験生が共通理解を持つ必要があります。また、特に時間的な制約が大きい私立大の事情を考えると、短時間に処理が可能な資料提供システム、つまり頓挫したJapan e-Portfolioに替わる効率的なシステムが整備される必要があると思われます。

5. 新型コロナウイルス感染拡大の影響

学校生活への影響

最後に、第3の観点「新型コロナウイルスが入試に与えた影響」を見ていきたいと思えます。

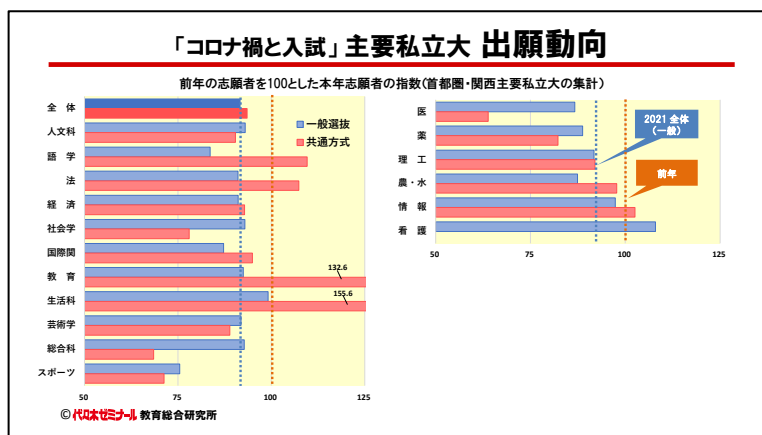
2020年2月ごろから連日報道で取り上げられるようになってきた新型コロナウイルスですが、教育現場への最初の大きな影響としては、やはり春の一斉休校を連想する方が多いと思われます。2020年2月27日に安倍晋三前首相は、全国の小中学校と高校に春休みまでの臨時休校を要請しました。当初は春休みと合わせて新学期までの休校予定でしたが、4月7日には都市圏を対象に緊急事態宣言が発令され、同月16日には対象が全国に拡大されました。その後、緊急事態宣言が一部地域で5月下旬まで延長したことにより、結果的に全国で2~3か月に渡り対面での指導ができませんでした。この休校により、多くの学校では学習の遅れが生じてしまったと考えられます。特に新学期は新しい人間関係を構築し、授業のルールを先生と生徒が共有するためのガイダンスが行われるなど、学校生活において非常に

重要な時期ですので、スケジュールを突然変更したことによる影響は計り知れません。弊社で実施している授業に関するアンケートの分析でも、例年と比較して学習に対する苦手意識が強くなったり、自身の成長を生徒が実感できていないといった結果が見られました。

また、感染予防が難しいということで予定されていた大会・発表会・検定試験の多くが中止になりました。この結果、大学入試の出願や選考に必要な課外活動の実績に問題が生じ、受験プランを見直すことになった生徒もいます。この問題は3年生のみならず、2年生にも大きな影響を与えています。3年生については過去の実績や成績をもとにしたアピールが可能ですが、2年生については、実績はこれから作る生徒が多いでしょう。2021年も大人数で集まって行う行事には制限が生じると思われますので、特に課外活動に力を入れる生徒については、不測の事態が起きた場合の対応も念頭に置いた上で、受験計画を立てるように指導することが重要です。

入試動向への影響

右図は首都圏と関西圏の主要私立大学の一般選抜について、前年度の出願者数に対する今年度の出願者数の指数（基準値100とする）を一般選抜全体とそのうちの共通テスト利用入試に分けて学部系統別にまとめた横棒グラフです。まず、注目すべきは前年の志願者数を示



す橙の破線と左上の全体志願者数の比較です。一般選抜・共通テスト利用入試ともに前年度よりも志願者数が大きく減っていることが見て取れます。

全体として昨年より一般選抜の志願者が減った原因として、次のことが考えられます。

- ①一人当たりの受験校数が多い高卒生が減少した。
- ②大きな入試制度変更の年にあたって、「安全志向」が働いた。
- ③入試制度変更及びコロナ禍に対する懸念から、早く結果が出る他の選抜方法を選択した。
- ④受験にともなう感染リスク（移動、試験会場での接触）を避けた。
- ⑤コロナ禍により、事前の大学見学などができなかった。（遠隔地の大学の印象が弱い）
- ⑥コロナ禍により、多くの大学がオンライン授業中心となっており、都会に出向く必要性（魅力）が低下した。

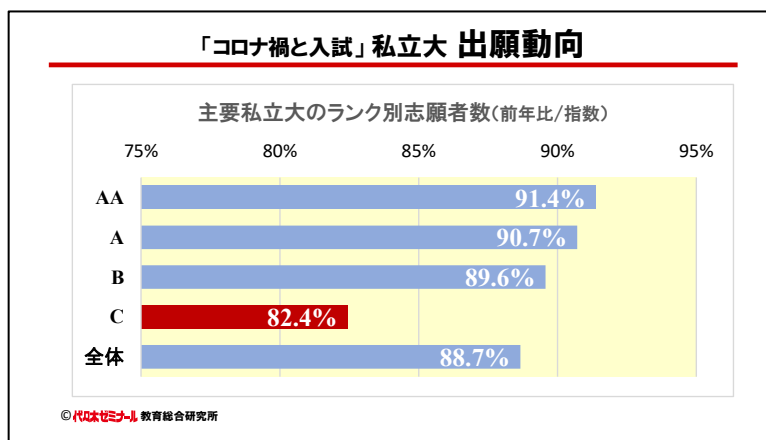
次に、系統ごとの結果を確認していきます。基準として本年度一般選抜全体の指数を示す青い破線にご注目ください。語学系や国際系など留学が選択できるあるいはカリキュラムに含まれるような系統は志願者数が減っていることがわかります。また、スポーツ系の志願

者数が減っている点については、大会や記録会が行われなかったあるいは縮小されたことで、生徒がスポーツを進路として選択するためのモチベーションを維持できなかったものと思われる。

一方で、IT 企業に注目が集まり文系受験生も受験できる情報系は、近年受験生からの人気が高まっており 21 年度も相対的に多くの出願者を集めました。このように学部系統ごとに動向は異なりますが、出願者の多い人文科学系統・経済学系統・理工系統を見ると、文系と理系で動向に明確な差異は確認されませんでした。

しかし、文理では差がなくともランク別に見ると出願状況に差が見られました。

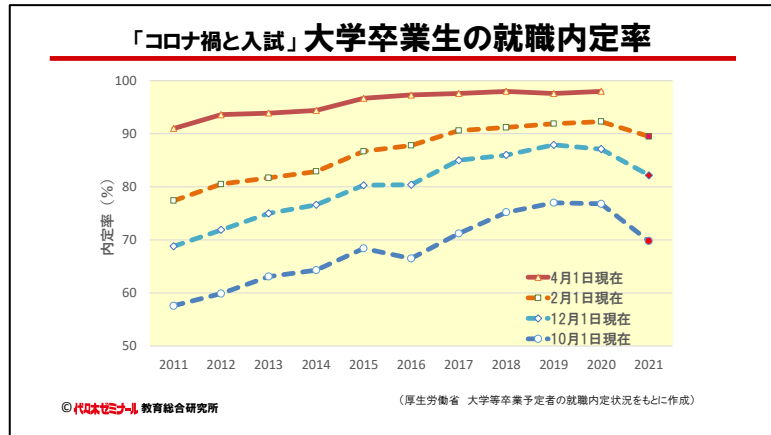
右図は、全国の主要な私立大学をランク別に分けてそれぞれのグループの出願動向を前年と比較した横棒グラフです。ここまで見てきた B ランク以上の大学より少し易しめの C ランクのグループで出願者が大幅に減少していることがわかります。21 年度入試について



は、高卒受験生の減少やコロナ禍の影響で大学志願者数そのものが減少することが予想されていました。それに対してレベルが易しめの私立大学を中心に、入学者の確保を目的として総合型や学校推薦型の合格者を増加させたため、そこで合格を勝ち取った受験生が一般選抜に出願しなかったことが背景にあると考えられます。

22 年度への影響

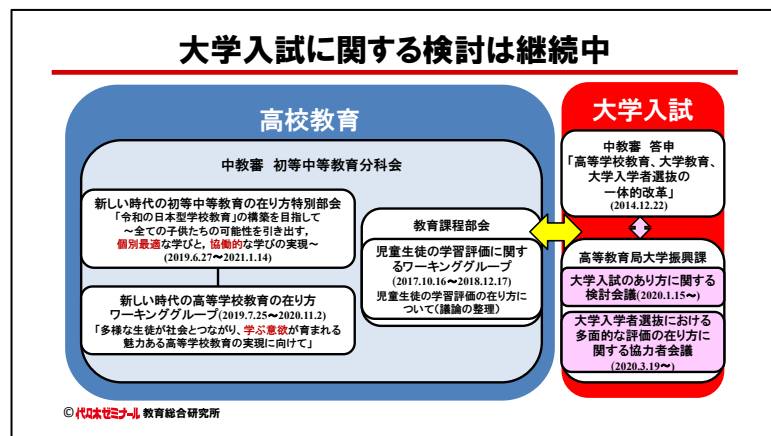
コロナ禍にともなう緊急事態宣言に代表される様々な自粛が社会に与えた影響は甚大です。多くの活動・業務が停止あるいは縮小され、収入が大きく減った方もいらっしゃいます。こうした状況を反映して、経済状況もリーマンショック、東日本大震災以上とも言われる打撃を受けました。一つの指標として大学生の就職内定率を見てみます。右図は、厚労省が公開しているデータを基に作成した大卒予定者の各時点での内定率の経年推移をまとめた折れ線グラフです。2021 年度の数値にご注目ください。10 月時点での内定率



が 2020 年度と比較して大きく低下しています。これは航空業界や製造業界、飲食業界など渡航制限や活動自粛で業績が悪化した企業が採用活動の縮小や延期を行った影響と考えられます。一方で、ドラッグストアなどの小売業や IT 企業などコロナ禍により需要が増し経営が好調な企業もあります。そうした企業が採用を広げたことが底支えとなり、12 月以降の内定率は幾分回復していますが、やはり平年よりも低くなっています。過去のケースから、景気が悪化し内定率が低くなると就職に強い理系学部や難関大学の出願が増えることが分かっていますので、22 年度入試についてはこの点にもご注意いただければと思います。

6.まとめ

こうして振り返ってみますと 21 年度入試には非常に大きな混乱があったことが確認できます。こうした混乱からの立て直しを目的に、文科省内では「大学入試のあり方に関する検討会議」や「大学入試における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」の中で大学入試に関する検討が行われています。これらの会議は高校教育改革とのリンクも意識しつつ検討を進めており、「記述式」や「英語 4 技能」や「多面的・総合的評価」の扱いも含めて昨年中に一定の結論を示すとしておりましたが、21 年 3 月末時点でも議論が続いております。



「記述式」と「英語 4 技能」に関しては、現在の検討でもその重要性が認められています。ただし、共通テストのような全体的な枠組みに盛り込むには従来指摘されていた課題を解決できていないため、実際の活用方法はそれぞれの大学の個別試験の中で大学ごとに検討すべきではないかというのが、現在の議論の方向です。

「多面的・総合的評価」に関しては、本稿にも記載した通り学力の 3 要素をバランスよく評価することが目標とされておりました。一方で全ての入試区分でそれを目標とするのであれば、複数の区分を設ける意義が薄れるのではないかという意見もあります。「多面的・総合的評価」についても、個々の入試区分にとられるのではなく各大学が実施する選抜全体の中で、それぞれの大学がバランスよく 3 要素を評価することを目指した方が良いのではないかという意見が優勢です。

いずれも「新しい大学入試」を特徴づける新機軸であり、中教審の答申でも華々しく打ち上げられた方針でしたが、実現可能性の壁に阻まれた格好です。とはいえ、技術的な課題を徐々に解決しながら、今後もこの方向性は維持・拡大されると思われます。日々の授業についても、この方向性を意識した工夫が重要なのではないのでしょうか。

(おわり)

本稿は、2021 年度春期教員研修セミナー「概説講義」の内容を一部修正・加筆したものです。